

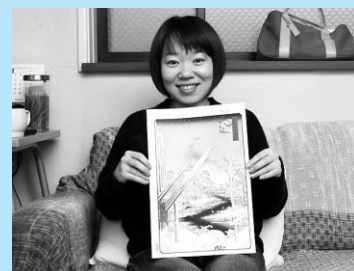


「いまだに東京の木版画の組合では私がいちばん若手です。育てるとか教えるとかやらないといけないって話は何度も出ていますよ」

「彫り10年」と言われる奥深い技術。「定期的に入るのは千社札くらいで、明日仕事が

あるかどうかわからない」という厳しい環境。そんな中で、ようやく職人を名乗れるようになった小池さんが背負っているものは、少々過大かもしれない。「人生に、びっくりすることなんかなくていいと思ってる」と笑う。スリッパやエレファントカ

シミシ、勝新太郎が好きな小池さんの個性は、まだタヌキの中にいる気がする。伝統技術を身に付けた女性職人が殻を破った時、本人もびっくりするような力を、きつと見せてくれるに違いない。



PROFILE

こいけ・かよこ

1976年、東京都足立区に、4人兄弟の2番目として生まれる。小さい頃からひたひたに絵を黙々とやるのが好きで、人付き前は、都立平雲高校を卒業後、一人家で、誰ともしやべらず木を彫って暮らしたら素晴らしい、と思ってた笑。荒川区に住む彫り師の親方に弟子入り。5年の修行で2年のお礼奉公の後、独立。日本全国でも数少ない女性木版画彫り師。

職人の技

シリーズ 21 木版画彫り職人

小池香世子 さん



文 = 篠塚義成
text: Yoshinari Shinozuka
写真 = 林 泉
photo: Izumi Hayashi

若い女性職人の登場である。

しかも木版画の彫り師という職種自体が絶滅の危機にある世界の、貴重な後継者。しかし当の小池香世子さんは、そんな世間の期待を軽くかわすように、自宅6畳間の作業場で、淡々と版木に向かっていた。

床に置かれた小さな木製の作業台の上には、天井から長くたらしした裸電球。その手前には、手元に影がでるにいくするのための水入りフロムがつり下げられている。入門時に親方からもらい、自分の手に合わせて形を整えた小刀で、小池さんは桜の板に、細かい線を刻む。

ないけど、高校の卒業生に版

画の彫り師になつた人がいて、『木を彫る仕事なら、一人で黙々とできるな』と思つて、荒川区の伝統工芸展に行き、そこに出来ていた彫り師の親方に弟子入りを志願。

「当時、親方は40歳そこそこでこの世界では一番の若手だからから迷つてみたい。でも私は親方の仕事場には自宅から自転車を通えるし、授業料を払つて大学とか行くことを考えたらタタで修行させてもらえるのだから、『お給料なしでいいです』って、押しかけ弟子入りみたいな形です」

最初の練習は、江戸時代の職人がやっていたのと同じ、仮

名手本志臣蔵の版木を彫る修行。筆文字ならではの曲線や細かい線を、繰り返し彫つていった。

「桜の板つて固いから、曲線を彫るときに小刀がよく折れるんです。そしたら研ぎ直して、また彫る。一年間ぐらい続け

たかな。つらい？ いや、黙々とできて楽しかったですよ」

飽くことを知らぬ、というのには立派な才能だ。やがて小池さんは、親方が手がけていた干社札の仕事を手伝い、2003年には広重の複製制作ブ

口シエクトにも参加。作品は江戸東京博物館で展示された。

「昔の彫り師が間違えたんしゃないか、なんていう部分もある。勉強になりました。でもね、江戸の絵師や彫り師、刷り師は芸術家でなく職人で、版木もだいたい5枚で刷れるように収まらなくて、実はそんなに

難しくありません」

浮世絵は、墨の線で輪郭を描いてその中に色を塗る、いわば塗り絵状になっている。できるだけ効率的に絵を刷れるよう、大量生産のシステムが出来上がっていたわけだ。一方、小池さんが難しくて好きしゃ

ない」と苦笑するのが、京都を中心に作られている現代版画や、油絵や日本画の版画化だ。そつだ。

「時々頼まれるんだけど、ほかしとか色の濃淡とか、浮世絵にはない技術を工夫しないとイケないんです。何度もやり直して、でも出来上がりは刷り師に渡してみないとわからない。相談しながらやればいんだけど、私、そつというのが苦手だからこの世界に入ったんだけどな(笑)」

それでも最近はずっとひとりだけでやっちゃいけない」と機会を見つけて全国の若い彫り師や刷り師と交流している。

昔の浮世絵を復刻したら

「これ失敗?」って発見したり。